

- 国語科の授業のアイデアを広げたい!
- 具体的な実践事例を知りたい!
- 授業の導入に使える小話はないだろうか?

そんな先生方のために、秀学社国語科通信シリーズをスタートします。

「評価」の指し示す範囲と「振り返り」

北海道教育大学附属札幌中学校
鈴木 真之介

「評価」という言葉の示す範囲

皆さんは、「評価」という言葉から何を真っ先に連想するでしょうか? 「成績」「到達度」「価値判断」「チェック機能」など、様々なニュアンスをもつ言葉であるために、誤解や行き違いが生まれやすいものの一つだと思っています。まずは、この言葉の指し示す範囲を「学習者（生徒）への評価」に絞って考えてみます。

左下の写真をご覧ください。中学校一年生の学習で、「少年の日の思い出」を教材にして「この小説のもつおいしさ（もちろん比喻です）はどんな味?」という課題を設定し、追究している一場面です。ICT端末を用いてコメントし合う、紙媒体を用いて整理する、立ち上がって相談する…など、学び方が多様化・多層化している様子が分かります。

この生徒たちはどのように思考しているのか。目標に対してどのような段階にいるのか。よく学校現場では「みとる」などと言われる、学習状況を把握するため「Assessment」という「評価」が、この言葉の指し示す範囲の一つ目です。

一方で、「評価・評定」などに代表される、いわゆる「成績」としての「評価」は Evaluation としての「評価」です。「毎時間書かせているものへの評価が終わらない!」という先生の苦労話を伺うことがありますが、この場合、Assessment としての「評価」をするだけの場面において、Evaluation までを包含する、あるいは両者の範囲を混同すること起因する「苦労」なのではと考えられます。改めて、言葉の指し示す範囲の大切さを感じます。



Assessment とついの振り返り

「評価」のもつ二つの範囲について触れてきましたが、ここでは一つ目の Assessment とついの「評価」に注目してみます。

先程の写真のように、学び方や学習活動が多様化・多層化している現在の教室において、それぞれの生徒の学習状況を「みとる」ことは容易ではありません。紙媒体への記述内容を観察するのと、ICT端末への記述内容を観察するのでは、教師の立ち位置や動き、目線の運び方などが大きく変わります。話し合いやチャットでのやり取りも同時進行する時間において、教師一人の目で即時的に、全員の状況を把握することは（少人数指導などのケースを除けば）非常に困難です。

そこで、その場で「みとる」教師の目を補助するツールとして、「振り返り」を利用することが考えられます。ただし、あくまでも Assessment とついの「評価」を目的としているため、①記述したことがそのままいわゆる「成績」云々に直結するものではないこと、②思考の状況や課題に対

する学習状況を確認するものであることの二点について、教師・生徒の双方の共通理解を図った上で用いる必要があります。本来の目的が見失われると、「とにかく長く書けばいい」「できたことだけをたくさん書こう」など、適切な Assessment を阻害する要因が増えてしまいます。

実際の記述例から考えてみます。先程の学習における「振り返り」の例を下に示しましたが、その内容からは、「学習活動への感想」とは一線を画していることが分かると思います。これは、生徒に任せているだけでは書けるようにはなりません。何についてどのように考えたか、この授業で何が得られたか、今後の見通しはどのようなものかなど、記述するポイントを明示的に指導する必要があります。

そして、この「振り返り」が適切さを増すほど、生徒は自分自身の学習状況を適切に把握でき、教師はその内容から次の授業プランの軌道修正を図ることができま

す。授業に対する「評価」としても非常に有効に機能する可能性があるのです。
では、次回はこの「振り返り」の質をどのように高めていくかに焦点を当てたいと思います。

今回は言動を考える時、難しいと感じたが改めて文章を見てみると蝶に関することはやたらと華美されている印象があるから、第三者から見て普通でも、「僕」からしたらすごく貴重なものだということがなんとなく感じた。また、小さいときの「僕」はだいぶエーミールと蝶を中心に心の世界(?)が広がっており、それ以外のことは全く書かれていなかったからそれほど僕にとって重要なことだとわかった気がする。今回はあくまで「気がする」や感じたなので次回はその根拠を探していきたい。

編集部のつぶやき

言葉には心がはりついている

先日、歌人俵万智さんの生活に密着した番組が放送されていた。何気ない日常の中から短歌が生み出される様子を映し出したもので、大変興味深く面白く視聴した。俵さんは、「言葉と心は一对で、言葉から言葉を紡ごうとすると心が置き去りになってしまう」「言葉には心がはりついている」と考えているそうである。俵さんの考えを聞き、考えていることはあるのにどんな言葉を使えばよいか分からず口でもったり、不用意に口に出した言葉で、誰かを傷つけてしまったりした経験は誰しもあるのではないかと思います。自分の心や考えを表すのに、最もふさわしい言葉を選び取れるよう、豊かな語彙を身につけたいと感じるいい機会になった。(編集部：大石)

秀学社 国語科 LINE公式アカウント
コクカフェ

▼役立つ情報を配信します。
ぜひご登録ください。

